

会員の広場



飯山正受庵

安間 孝信（東京）

今年3月、北陸新幹線が開通し、これまでは終着の長野から飯山迄は更に一時間掛かったが今は東京から二時間たらずで行ける。

大学の合宿で何も知らずに連れられて行ったのがこの飯山に有るお寺「正受庵」だった。思っていたお寺とは全く違ってちっぽけで

檀家は無し。聞けば臨済宗妙心寺派の別格寺院で雲水など修行僧の専門道場であった。

軽く笑みを浮かべて「おう、来たか」と言った住職は酒井昭道盤山と言いつのあと私が大変に影響を受けることに成った和尚だとは思っても寄らなかつた。そればかりではなく実は高名な和尚だったのであった。

「正受庵」について少し注釈する。

初代開祖は飯山城主の嫡男であったが自ら進んで仏門に入った。諸国行脚の修行の後大悟を得て故郷飯山の地にこの庵を結び正受老人と名乗り修行の毎日を過ごした。

ある時、白隠禅師が諸国修行の途中立ち寄つた。「田舎の庵に何か得るものが有るか」と慢心したのを正受老人に看破され蹴飛ばされた。

これを反省した白隠は此処にとどまり、正受老人の下で修行し、後に臨済宗中興の祖と言われる禅師となった。

正受庵の門に通じる道は「白隠禅師蹴落としの坂」として今も残っている。

盤山和尚もこの庵を終生修行の場所とした。合宿は早速稽古と想っていたら、毎朝四時に起こされ、顔を洗って道場で座禅が始まった。しかしいつまでたっても終わる気配が無い。気が付いたのだが修行僧とほとんど同じ生活が始まっていたのである。

毎日長い座禅と本堂や道場、庭とトイレの掃除、それに飯の当番と全くの寺男である。楽しみに成つたのは夕食の後の和尚さんとの話であった。

話題は仏教だけでは無い。それこそ様々な事を日替わりで夜遅くまで議論した。

その中で仏教についての話が有った。「東洋に流れている宗教というのは一元的宗教と言って本来自己を基本とするものである。西洋のキリストやイスラムと言われる宗教は二次的宗教で、神と人間との相関関係における宗教で神は絶対者だ。仏教には自分以外の世界に絶対を求めるといふ考え方は無い。その辺りが非常に違うところで同時に難しい処だよ」何か心の霧が晴れた様な瞬間だった。

その和尚は残念ながら病を得て昭和六十一年、五十六歳という若さで遷化された。

久しぶりに墓参りに正寿庵を訪れ和尚と歩いた北信州の山を眺めてみたいと思つて居る。